

「子どものうた弾き歌い」の指導法についての一考察

— 《生活の歌》を中心に—

上田 浩平

Teaching method of "Children's singing songs"

in music expression

— Focusing on “ The Song of Life ” —

Kohei Ueda

Abstract

This study summarizes the methods of teaching "children's singing songs" by piano that students who have entered the nursery school and the elementary school teacher training school by the time of the graduation by the music practice piano and the vocal music beginner's study and practice through the author's practical experience of eight years. In addition, in the field of expression, which was announced in 29th year of the Heisei ear as a new kindergarten education guideline and the nursery childcare guidelines, i think that "children's singing" using the piano will be reviewed more than ever, and in addition to piano technology, improvisation will be necessary in the field of childcare. In order to respond to the scene where such a transformation is forced, it is the one to present one consideration to lead to the research in the future considering that the guidance method changes not only the environment and the age where it grew up but also the female student and the male student again.

Keywords : Children's singing songs, piano, vocal, method

1. はじめに

私は8年間、短期大学の保育科や幼児教育学科、大学の教育学部において、将来、保育士や幼稚園教諭、または小学校教諭を目指す学生に音楽の授業を担当してきた。養成校により、「子どもの音楽表現」や「器楽(ピアノ)」、「声楽」など様々な名称で授業が設置してあるが、その多くがピアノによる《弾き歌い》ができることを最終的な目標としている学校が多い。その大きな理由は、保育現場において生活習慣や園の行事など、多くの場面で音楽表現が使用されており、子どもたちの成長を促す上では大変有効なものであるためだ。そのため、保育士や子どもと接する職業に就く者にとってもは必須の技術である。本研究では、高等学校卒業までピアノ初心者・声楽初心者を対象に、卒業するまでの指導法を筆者なりに呈し、一考察したものである。

また、平成29年度に新たに告示された〈幼稚園教育要領〉と〈保育所保育指針〉に位置付けられた音楽の領域では【表現】の分野に分類された。このことにより、幼児教育の中で、子どもの豊かな表現力や感性を養うため、音楽活動や音楽あそびを取り入れることが、これまで以上に保育の現場で必要となる。そのためには、これまで各養成校が授業で開講していた内容はもちろんのこと、それに加えさらなる応用力や即興力が必要になると筆者は考えている。そのため、男女間や世代を超えてピアノの技術向上を図ることが重要であろう。

とりわけ、養成校において所属が多い若い学生は、スポーツを続けている学生が多い。しかし、それに比べて「ピアノ」を続けている学生は非常に少ないのが現状であると感じている。子どもに、スポーツと文化活動の両面において習い事をさせたいと願っている保護者は多いであろう。しかし、現代社会において実際に必要を感じ通わせているのは塾などの学力向上に繋がるものが多い。文化活動という面で、「音楽」を選択することが減少しているのもまた事実である。しかし、音楽活動を合唱部や吹奏楽部などで続けている学生は決して少なくない。部活などの日々の練習時間は短いながらも、長年続ける生徒もいる。そのため管楽器が身近な学生は多い。だがしかし、ピアノとなると途端に減ってしまう。

また、女子学生に比べてスポーツ経験が多い男子学生に関しては、女子学生以上に稀である。野球などの球技をしている男子学生は指が非常に硬く、1本1本の指を動かすことに慣れていないため、極めて苦手意識が高く、苦戦を強いられている男子学生は多い。そんな学生にも、確実に技術向上が可能な指導方法を、筆者なりに研究し、実践してきた。保育士養成校に携わる者として、今後の更なる研究に繋がりたいと考えている。

2. ピアノのレッスンについて

短期大学や大学に入学してはじめてピアノのレッスンを受ける学生は非常に多い。そのため、指導者はまずピアノ椅子の座り方、ピアノとの距離、腕・指の位置や高さなど最初の授業で教えることが多いであろう。今回はピアノのレッスン方法については省略

するが、多くの養成校ではバイエルを使用するところが多く、指を作るためには必要なことであると筆者も考える。バイエルで指をしっかり立てることを覚え、楽譜の見方などにも慣れていき、ピアノが好きになる学生も多いであろう。

筆者が、日々の授業で感じていることの一つに、既にも上記しているように、女子学生よりも男子学生が1本1本の指を動かすことに苦戦する学生が多いことである。また指が太く、鍵盤に指を置くことも難しい学生もいる。ここであきらめずに、丁寧に指導することで、徐々に苦手意識を減らしていくことが重要であり、女子学生との大きな差が生じないように、指導を進める必要がある。ピアノの指導法については、本研究では省略するが、ある程度の技術が身についてきたところで「弾き歌い」へと移行していくことが理想であると筆者は考える。

3. 「子どもの歌弾き歌い」の指導法について

保育士養成校、幼稚園教諭養成校、初等教育教員養成校において、音楽の技術習得の最終目標の一つである「子どもの歌弾き歌い」は、非常に複雑な行動を伴っていると考える。「楽譜を読む」、「ピアノを弾く」、「歌を歌う」という行動を同時に行わなくてはならない。初心者にとっては直ぐに習得できるものではなく、日々の鍛錬が必要であろう。しかし、決してあきらめることなく、日々の訓練において十分修得できる技能である。そのことを常に学生に伝え続けることが大事である。そして、その目線の先に「子どもたち」という対象がいなくてはならない。筆者が以前にも述べたことであるが、音楽活動は身体及び情緒の発達だけでなく、生活習慣の育成にも大いに役に立つ。そのため、毎日活動することが重要である。それが故に、子どもに携わる者にとって必要技能であり、修得すべき技能である。ここでは、「子どもの歌弾き歌い」において特に学生が難しいと感じることが多い《生活の歌》を取り上げ、保育現場等で使用される頻度が多い曲目を中心に1曲1曲の指導方法を呈していくこととする。

(1) 生活の歌

学生にとって、「季節の歌」や「いろいろな歌」、そして「流行歌」等は比較的耳に馴染むことができる。しかし、「生活の歌」となると、本人が通った園の事情により、全く初めての曲目に直面することもあり、一気に学生の苦手意識が増大する。そのため、「生活の歌」で苦戦し、「季節の歌」や「いろいろな歌」へと曲目を増やしていくことが遠のいてしまう学生は少なくない。ここではその《生活の歌》から、以下の5曲を取り上げる。

《おはよう》

増田とし 作曲。

本多鉄磨 作曲。

四分の二拍子。

ハ長調。

大きな特徴として、子どもの歌に多く使用される付点のリズムが、この曲にも多く使用されている。また、前奏の指番号が初心者には大変難しく、困難を要する学生は多い。

【譜例①】



上記の【譜例①】は、一般的な指番号であり、女子学生にとっては問題ないが、手が大きい男子学生にとっては窮屈であり、より弾きにくくなってしまう。そのため男子学生にとっては下記の図に示した指番号が適当であると考えられる。

【譜例②】



【譜例②】のように、2小節目の指番号が2→1→2→4では、2の指の下を通して1でミを弾こうとすることで、腕があがり、肩が上がるため、力が入ってしまい、弾くことがより困難になると考えることができる。よって、筆者が考えた指番号は、1→2→3→4とすることで、手の大きさを利用し、且つスムーズに指を動かすことが可能になり、弾きやすくなることが考えられる。実際、男子学生にとっては理解しやすく動きやすいことによって格段に上達した。

そして、この曲の一番の難所であり、女子学生、男子学生ともに困難であるのが曲の終わりの下記の【譜例③】の部分である。

【譜例③】

A musical score for a piano accompaniment of a song. The score is written on a grand staff with a treble and bass clef. The lyrics are written below the notes: お は よう お は よ う. Two red circles are drawn around specific notes: one around the first 'お' in the bass clef and another around the 'は' in the treble clef.

手で裏拍をたたかせるなど、実際に身体で感じることができる指導法を行うと良いであろう。また、付点のリズムができない学生が多いため、スキップをさせるなど、全身を使ってリズムを修得させることも有効であると考ええる。

そして、最後の休符をしっかりと感じさせることで2拍子の感覚を確認させることも大切である。学生によっては、拍に関係なくずっと伸ばしてしまう学生が多い。つまり4拍子のように、倍の長さになる学生が多くいるため注意が必要である。

《おかたづけ》

作詞・作曲者 不明。

小林つや江 編曲。

四分の四拍子。

へ長調。

【譜例④】

A musical score for a piano accompaniment of a song. The score is written on a grand staff with a treble and bass clef. The tempo marking is ♩=112. The lyrics are written below the notes: お か た づ け お か た づ け さ あ さ み な さ ん お か た づ け.

子どもの歌では、もっとも短く、同じリズムの繰り返しのため、学生が一番に弾きたがる曲である。この曲も上記の《おはよう》と同じく、付点のリズムが大事である。付点のリズムが修得できるまで、繰り返し練習を課すことが重要である。学生にとっても譜読みもしやすく、好んで弾こうとする学生が多いため、最初の1曲目としての教材には最適であると筆者は考える。

ピアノ初心者では「弾き歌い」はハードルが高いため、この曲で「弾き歌い」の楽しさを体感できると、その後の技術向上に繋がると考えられる。

男子学生の中には、4拍目の左手が、右手と同じように伸ばしたままになってしま

う学生も多い。最後まで楽譜に注意を払えるよう、丁寧な指導をすべきである。

また、符点のリズムを理論的に理解している学生は少ない。まずは符点のリズムをしっかりと説明し、頭での理解も必要である。ここで符点のリズムを理解させることで、後々の譜読み能力に大きく左右することになると考えられる。

《おべんとう》

天野 蝶 作詞。

一宮道子 作曲。

四分の二拍子。

ハ長調。

この曲は、多くの保育現場で昼食の時間に長年使用されている定番の1曲である。また、給食を食べる園では「おべんとおべんとうれしいな」ではなく、「きゅうしょくきゅうしょくうれしいな」と、「おべんとう」を「きゅうしょく」に置き替えて使用していることが多い。そして最後に、「いただきます」という言葉を入れている園も多い。こどもたちの生活に密着した曲であり、園によって工夫をすることで非常に使い勝手の良い1曲である。

【譜例⑤】

♩ = 120

おべんとう

おべんとうれしいな おててもきれいに

【譜例⑤】に示したように、付点のリズムと八分音符との組み合わせでできている。しかし、耳馴染みしているがゆえに、すべて付点のリズムで歌ってしまう学生が多い。それは、実際に付点のリズムだけで書かれた誤った楽譜が存在することと、学生自身が幼児の時に付点のリズムで歌っていたため、そのままの記憶で歌ってしまう学生が多いからである。また、園によっては保育士や園長などが手書きした楽譜を使用している園もあるため、間違いが修正されないまま歌い続けてしまうという園も少なくない。そのためこの曲に関しては、まず教員が模奏をすることで、リズムを正確に提示することが大切である。リズムを叩かせたり、一緒に歌ったり弾いたりすることで、正しいリズムを修得させることが養成校の教員の役割であると考えられる。

《はをみがきましょう》

則武昭彦 作詞作曲。

四分の二拍子。

ハ長調。

この曲も、上記の《おべんとう》と同様に、多くの保育現場で使用されている定番の1曲である。【譜例⑥】の前奏部分からも分かるように、この曲は付点のリズムの連続であり、学生に付点のリズムを修得させる上で、非常に良いテキストである。上記に述べた《おかたづけ》と関連して練習させることで、学生のリズム習得を効率良くすることが可能であると考えられる。また、左手が四分音符になっているため、拍数の関係も理解しやすく、付点のリズムは多用される「子どもの歌」への苦手意識を下げることに繋がる。

【譜例⑥】



また下記の【譜例⑦】に歌詞を記しているが「シュッ」の部分で出てくる促音の表現を忘れないようにしたい。保育士が「オノマトペ」を上手に扱うことは歌だけでなく、ピアノを弾く際にも取り上げて欲しい表現の一つであると筆者は考える。音楽の楽しさを伝えるうえでも重要な表現方法である。

【譜例⑦】

は を み が き ま じょう シュウ シュウ シュウ
 ブ ラ シ の た い そう おい ち に おい ち に
 じょ う ぶ な は に な れ シュウ シュウ シュウ

ピアノの演奏方法もスタッカートを用いて短くするなど、楽譜には記載がされていないが、子どもたちが楽しく歯をみがくことができるように、音楽表現を用いることは重要である。

《おかえりのうた》

天野 蝶 作詞。

一宮道子 作曲。

四分の四拍子。

ハ長調。

子どもたちが、園から帰宅する際に歌うことが多い1曲である。園によっては様々な歌でさようならの挨拶をするが、今回は、学生が実習先に行った園など、勤務校周辺の園で一番使用されていた《おかえりのうた》を取り上げることとする。この曲は様々な編曲があり、左手が簡素になったものも多い。

また、【譜例⑨】に上げたように、※マークの箇所の記譜の仕方にも違いがある。

【譜例⑨】では三和音を使用しており音楽的にも非常に豊かであり、是非使用して欲しい一方、同時に1・2・5番の指で3つの鍵盤を押すため、ある程度の指の力が必要となる。その為には、ある程度の練習時間と演奏経験が必要となる。【譜例⑧】のように、2つの音を1と5番の指を押す楽譜の方が、比較的に弾きやすくなる。

【譜例⑧】

♩ = 120

きよーう もた のし く

す み ま し た な か よ し こ よ し で か え り ま よ う せ ん せ い

さ よ な ら ま た ま た あ し た

1. 2.

【譜例⑨】

8va

そして、学生の多くが曲の最後の十六分音符の連符を目にした途端に「この曲は難しい」と判断してしまう。バイエルの練習で、既にスケールは修得しているため困難ではないはずだが、視覚からの情報だけで判断してしまうため、必要であれば、この曲も教員により模奏することで、学生の恐怖心を取り除くことが可能であろう。

尚且つ、この曲を取り上げる際には、繰り返し記号やオクターブ上げて弾くための奏法記号「オッターバ(8va)」などの音楽記号の習得にも注意を喚起させ、音楽の基礎知識習得にも繋げたい。

【譜例⑩】



4. おわりに

上記に述べたように、まずはピアノがある程度弾けるようになってから、歌唱をすることが大切であると筆者は考える。ピアノが疎かになっている状態で歌唱すると、指も動かなくなり、1音弾いては止まり1音弾いては止まり、と音楽を進めていくことができない。両手である程度ピアノが弾けるようになってはじめて、右手と歌で練習させる。間違っただ箇所は繰り返し練習させるよう促す。そして次に左手と歌を練習させる。このことで、伴奏とメロディーの関係性がはっきりしてくる。伴奏の上にメロディーが成り立っていることを学生自身に体感させることで、リズムの理解を進めることができる。両手にいきなり歌を付けて練習してしまうと、伴奏とメロディーの関係性の把握が難しくなり、音楽の構造を理解することが困難になる恐れがある。

常に学生の立場になり、短い時間の授業レッスンでも、上達したという達成感を学生に味合わせる事が非常に重要である。そして、その小さな達成感の積み重ねが、その後の学生の自主的な取り組みへと繋がると確信している。教員として1曲でも多く修得させなければという想いも十分理解できるが、まずは弾き歌いに関して、苦手意識を排除することが大切であり、楽しい体験によって、子どもたちの前に立った時に、自然と笑顔になることができるよう、学習環境を整えたいと筆者は考えている。

【参考文献】

- 井戸和彦 (1996年) 「幼児と音楽表現とその環境」 大学教育出版
中村智子 (2010年) 「大好き♪みんなのうた」 権歌書房
笠井キミ子 鶴田智子 久原広幸 柴田万世 (2013年)
「こどもといっしょに」 権歌書房
平松愛子 中島美保 中村寛子 (2019年)
「音楽(ピアノ教本)」 近畿大学九州短期大学